



AMBOISE  
CHÂTEAU ROYAL

見学用パンフレット



## アンボワーズ王城のテラスにて

- ← 向かって左側に、むかし七要徳の館があった場所に造られた、大型鉢が連なる新しい庭園が広がります。
- ↑ 傾斜路の向かいには、サン・テュベール礼拝堂が、
- そして右側に建てられたのは15世紀と16世紀の王族の居住棟です。
- ↓ その奥に、緩やかな傾斜のある庭園と巨大な2基の騎兵の塔が見えます。

ルネッサンス期に、王族は住居として、権力の象徴として、そしてまた政治・経済・芸術活動が集中する場としてこの城を利用しました。フランドルやイタリアから様々な建築様式が導入された枢要な時代の記憶を、この王城はとどめています。イタリアは、16世紀前半にわたりフランス国王の征服欲をかきたてたのみならず、その芸術性の高さが賛美されました。王族はアンボワーズに多くのイタリアの芸術家や知識人を招き、そのことが数十年間フランスのゴチック様式に影響を与え、独特の「初期フランスルネッサンス様式」を生み出したのです。ルネッサンス期に王族の権力の中心地であったアンボワーズ王城。ここは、ヴァロワ家とブルボン家の全ての王の邸宅あるいは滞在地でした。また、王子や王女の誕生、洗礼、結婚のみならず、陰謀や平和勅令のような、王国の様々な出来事の舞台となりました。城は王族を危険から守っていた、険しい要塞に囲まれています。王と王妃が一緒に暮らしていく時期には、後に国王となる人物の幼少時代の庭園でもありました。例えばシャルル8世はここで生まれ、フランソワ1世とその姉マルグリット・ダングーレーム、アンリ2世とカトリー・ド・メディシスの子供たちがここで幼少時代を過ごしました。

## 歴史の幕開けからルネッサンス期にかけて

アンボワーズは新石器時代から人類の住みかとなり、ケルト人の一部族であった、トゥロネス族が暮らす主要の町となりました。最初の要塞は、岩壁の突出部に建設され、ガロ・ロマンによる手工業の発達を促します。紀元後第4世紀には、町の上に建設されていた居住棟を守るための堀が造られました。503年に、フランク王国の王クロービスは、西ゴート族の王アラリックと、要塞の北側の対岸に位置する中州、イルドー (*île d'Or*) にて対戦しました。中世においてこの要塞は、対立していたアンジュー公とブルワ伯が、激しい攻防を繰り広げる舞台でした。1214年にフランス王フィリップ=オーギュストはトゥーレーヌ地方に入り、アンボワーズの領地をその支配下に置きました。

しかし1431年に、ルイ・ダンボワーズは王シャルル7世(1403年/在位1429年~1461年)の寵臣ラ・トレムイユに対する陰謀を企んだ罪で、死刑の判決を受けてしまいます。彼には恩赦が与えられましたが、アンボワーズ城は没収され、王領となりました。その後シャルル7世は、アンボワーズにて自由射手隊を創設。彼の後継者ルイ11世(1423年/在位1461年~1483年)は、主塔の近くに妻のシャルロット・ド・サヴォワが眠る礼拝堂を建設させました。アンボワーズはまた、ルイ11世の息子、後にシャルル8世となるシャルル王太子(1470年/在位1483年~1498年)の出生地でもあります。



ルイ11世



シャルル8世の肖像画



ヴァロワ家の系図

## シャルル8世治世初期の、フランス王国

### 不安定な政治情勢

シャルル王太子は父ルイ11世が亡くなった時、まだ未成年だったため、姉のアンヌ・ド・ボージューが摂政となりました。それに対し、シャルル王太子の従兄弟、オルレアン公は、ブルターニュ公(1484年)やマクシミリアン・ドートリッシュ(1486年)と手を結んで、彼の権力の座を狙いました。こうして、フランス王に対する反乱、「狂った戦争」が、1486年から1488年にかけて勃発します。

### アンヌ・ド・ブルターニュとの結婚

アンヌ・ド・ブルターニュは、ブルターニュ公フランソワ2世(モンフォール家)から公位を継承しました。この当時、敵対関係にあったハプスブルグ家の帝国とヴァロワ家のフランス王は、ブルターニュ公国の所有権を奪い合っていました。1488年にフランソワ2世が亡くなると、フランス王に対する反逆であった「狂った戦争」に終止符が打たれました。一方ハプスブルグ家のマクシミリアンは、公位を引き継いだアンヌ・ド・ブルターニュと婚約を結んでいました。しかしフランス王シャルル8世はそれを無効にし、同時に、マクシミリアンの娘マルグリット・ドートリッシュとの婚約を破棄しました。そして1491年12月6日にアンヌと結婚しました。この二人の婚姻により、ブルターニュ公国はフランスに結びつき、1532年に併合が完結します。

アンヌはシャルル8世とアンボワーズで暮らしました。若い王妃は3人の王子と1人の王女を産みました。しかし4人とも夭逝してしまいます。その死別の悲しみにくれながらも、彼女は宮廷にてその意思を実現させました。女性の地位を向上させるため、身分や婦徳の高い女性を100人ほど彼女の周りに結集させたのです。また、自身の著名な時祷書の装飾画を描いたトゥールの画家、ジョン・ブルディションや、彫刻家ミシェル・コロンブのような才能のある画家たちを身辺に集めました。

### アンボワーズに滞在した王の大建設プロジェクト

シャルル8世は、アンヌ・ド・ブルターニュと1491年に結婚した直後、幼年時代を過ごしたアンボワーズ城に移り住むことを決めました。その翌年、彼は中世の居住棟の拡張と、サン・デュベール礼拝堂の建設を開始し、1493年に竣工。その後も南側の七要徳の館や、北側の王族の居住棟のプロジェクトに次々と着手しました。王がイタリアに発つ前に発注した建築物は、ゴシック建築のフランボワイヤン様式によるものです。

王は1496年に、多くのイタリア人芸術家を連れてフランスに戻りました。そして芸術家たちに、居住棟の内部の装飾を任せ、イタリア式邸宅の庭から着想を得た庭園を造らせました。今日においても、王の最も革新的な建設プロジェクトは、巨大な2基の騎兵の塔であると言えるでしょう。1498年にシャルル8世が亡くなった時には、王城の工事は全て終わっていませんでしたが、5年も経たずにプロジェクトの殆どが竣工を迎えるに至ったのです。

### フランス王によるイタリア遠征と、アンボワーズへの最初のイタリア人の到着

シャルル8世は、ナポリ王フェルナンテ1世の死去に際し、ナポリの王位継承権を要求しました。その要求の根拠は何だったのでしょうか。プロヴァンス最後の伯爵であり、1442年にアラゴン人が占領する前のナポリ王国の、「正統な」君主でもあったシャルル・ド・ヌーヴの継承者が、シャルル8世だということだったのです。

こうしてシャルル8世は1494年に、3万人の兵士を引き連れ、王国の遠征に発ちました。フランス軍は1495年2月にナポリに到着します。その後も、シャルル8世、ルイ12世、フランソワ1世はイタリア遠征を続け、ナポリ王国やミラノ公国に侵攻しました。王たちは数々の勝利を果たし(最も有名なのは1515年のマリニャーノでの勝利)、何度もイタリアを占領していました。アンリ2世は1559年にカトー・カンブレジ条約に調印し、フランス軍のイタリア半島進攻の終結を宣言しました。ただしイタリアに遠征をしたことにより、フランス王たちはイタリアルネッサンスの芸術に触れ、その感性に刺激を受けたのです。彼らはこの国から、画家のアンドレア・セルティ、カの高名な芸術家でありエンジニアであった、レオナルド・ダ・ヴィンチに代表される何人かの文芸家や芸術家をフランスに招きました。



## サン・テュベール礼拝堂



狩人の守護聖人であるサン・テュベールを奉るこの建築物は、ルイ11世時代に着工された礼拝堂の基礎の上に、1493年に建設されました。王族の人々が私的に利用する目的で建設されたこの礼拝堂には、ゴシック建築のフランボアイアン様式が用いられています。またこの礼拝堂は、1519年5月2日にアンボワーズで死去した、レオナルド・ダ・ヴィンチの墓が据えられていることで特に有名です。

### レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452年-1519年）の墓



レオナルド・ダ・ヴィンチの墓

チが担当したという説もあります。王と親しかった彼は、1518年、王のために饗宴の数々の余興を考案しました。



### 王族の居住棟向かい 側庭と堀

ロワール渓谷で最初のルネッサンス建築様式が現れた、アンボワーズ  
シャルル8世の死後すぐ、後継者ルイ12世（1462年/在位1498年～1515年）の治世下、要塞の南側とドン・パッティエ口の庭園に沿った回廊に接した、二番目の騎兵の塔、ウールトー塔が完成しました。

アンボワーズの町には税制上の特権が与えられていましたが、ルイ12世の死後、新しく王となったフランソワ1世（1494年/在位1515年～1547年）は「アンボワーズで幼少時代を過ごした思い出」のためそれを更新し、ロワール川に直角に交わる王城の翼棟を建て増しました。その翼棟の屋根窓にはイタリア調の柱形装飾が付けられ、ロワール川に平行に建てられたシャルル8世の棟に見られる、ゴシック・フランボアイアン様式の尖塔（ピナクル）を持つ屋根窓と対照的です。アンリ2世は後に、居住棟のルネッサンス様式の翼棟に平行して、その東側に別の居住棟を建設させました。一時期は部屋の数が220にまで達した、壮大な建築物の規模が想像できることでしょう。

### 王城の堀での悲劇的な球戯

有名な年代記作者、フィリップ・ド・コミニースがこの事件について記述を残しています。1498年4月7日、シャルル8世は王妃アンヌ・ド・ブルターニュと、ポーム球戯（その当時のテニス）を観るために、アクルバックの回廊に向かいました。この回廊は、7要徳の館の南北から王の居住棟にかけての堀の上に位置し、その堀で球戯が行われたのでした。この堀は17世紀に埋められ、19世紀にその一部が再度掘されました。シャルル8世はその時に回廊の扉のかまちに頭をぶつけてしまいます。彼は数時間後に、男性の跡継ぎを残すことなく、28歳で亡くなりました。



ゴシック建築の居住棟 - 1階  
衛兵の間, 衛兵の巡回路, 支柱の間



### 1. 衛兵の間

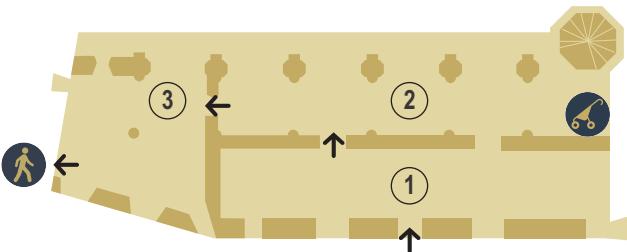
見学者が操作できる画面により、数世紀にわたる城の建設工事の段階をたどることができます。シャルル8世の治世下にて行われた当時の大がかりな建築工事の様子と、失われてしまつた七要徳の館の、壮麗な建築様式と装飾についてビデオが上映されていますので、是非ご覧ください。左に向かうと、城を護っていた衛兵の間が続く回廊に入り、見学順路が始まります。

### 2. 衛兵の巡回路

この開かれた回廊から、ロワール川での航行や渡河の様子を監視することができました。

### 3. 支柱の間

この間は、使用人や衛兵が、堀を見下ろす主塔の古い回廊と王の居住棟の間の行き来に利用していました。ここで見られる階段が、シャルル8世の盛装用の部屋（こんにち「鼓手の間」と呼ばれています）へと続いていました。



見学順路は、この間の奥から、階段を上って続きます。



この回廊の右にある柵の近くにベビーカーを置いておくことができます。見学終了後にベビーカーを取りにお戻りください。



居住棟の入口までお戻りください。居住棟の後ろ、庭園側から二階に上がります（表紙の地図をご覧ください）。オーマル公の回廊の下から、スロープを利用して二階に上げることができます。

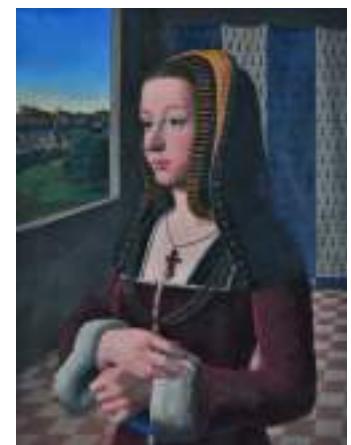


ゴシック建築の居住棟 - 2階  
鼓手の間

城に最初に滞在したのは、国王ルイ11世（1423年-1483年）でした。彼はその当時時折り城を訪れていましたが、王妃と後にシャルル8世となる息子とで旧主塔に泊まっていました。その滞在時に、ルイ11世はサン=ミッシェル騎士団を結成しました。騎士団は約360年存在し続け、それは現在のフランスのレジオン・ドヌールの延べ年数をはるかに超える伝統となっていました。その他にも、彼は1470年3月14日にフランスで最初の絹織物工場を設立し、ロワール渓谷に富をもたらしました。

### ブルターニュのフランス王国への併合（1532年）

フランス国王シャルル8世と、ブルターニュ公爵フランソワ2世の唯一の子孫アンヌ・ド・ブルターニュの1491年の結婚により、ブルターニュはフランス王国と人的に結びついた最初の時代を迎めました。シャルル8世が死去した時点において（1498年）、二人には存命の子孫がいなかったため、アンヌ・ド・ブルターニュ（1477年～1514年）は婚姻契約に従って、シャルル8世の従兄弟であるフランスの新国王ルイ12世（1462年/在位1498年～1515年）と再婚しました。ルイ12世の後継者であるフランソワ1世（1494年/在位1515年～1547年）は、ルイ12世とアンヌ・ド・ブルターニュの娘クロード・ド・フランス（1524年没）を妻とし、続いて息子のフランソワとアンリが継承権を持つ、ブルターニュ公国との統合を実現しました。1532年、「公爵兼王太子」であるフランソワが成年に達した年に、公国政府はフランス王国との統合を受け入れました。



アンヌ・ド・ブルターニュ



ゴシック建築の居住棟 - 2階  
**大広間**



ルネッサンス様式の居室 - 2階  
**大居室**

ルネッサンス期において、フランス国王は地方総督や官吏、地位の高い聖職者の忠誠を支えにしつつ王国の領土に権力を広げてゆきました。国王はまた、勢力のある諸領主に、国王の住居の近くに妻を伴って数ヶ月滞在することを要求しました。こうして貴婦人が宮廷に入場することとなりました。壮麗な接見や祝宴が、宮廷での生活に欠かせない娛樂となってゆきます。この間は、他の同様の大広間に先立って、そのような行事を催す場として利用されました。1518年に王太子の洗礼、そしてローマ教皇の甥ロレンツオ2世・デ・メディチとマドレーヌ・ド・ラ・トゥール・ドヴェルニュの結婚のため、宮廷の饗宴が開かれた中庭に面しています。この結婚は、マリニャーノで勝利したフランソワ1世が、教皇庁と欧州、特にイタリアの主な君主国政府に近づきかけとなりました。

#### フランソワ1世 (1494年/在位1515年～1547年) フランスルネッサンス芸術の偉大なる庇護者

ルイ12世は、従兄弟であり、彼の継承者とされていたフランソワ・ダングーレームを迎えるにあたり、アンボワーズを選びました。母ルイーズ・ド・サヴォワと姉マルグリットに付き添われ、当時4歳であったフランソワは、アンボワーズに移り住みました。彼は1515年に戴冠するまで、この城で幼年時代を過ごしました。彼はルネッサンスに魅了され、芸術を庇護した偉大な王とされています。彼は特にビュデ、マロ、デュ・ペレー、ロンサール、ラブレーといったフランスの知識人の庇護者となり、アンドレア・デル・サルト、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ベンヴェヌッティ・セリーニなどのイタリアの芸術家を身辺に集めました。また、ルイ12世が建設させた王城のルネッサンス様式翼棟を更に高くし、屋根窓をイタリア様式に従って装飾させました。

#### 檄文事件.....アンボワーズの陰謀、宗教戦争の発端

フランソワ1世は、1516年にボローニヤで教皇庁と協定を結ぶことで、教会に対する権威を示しました。彼はプロテスタントに寛容でしたが、その当時神学者の間で盛んだった論争に距離を置いていました。しかし、1534年の10月17日と18日の夜の間に、「教皇のミサの、恐るべき、重大な、耐えがたき弊害」を批判する内容の檄文が、王国の主要都市、そしてアンボワーズ城の王の寝室の扉にまで張られました。この挑発により、国王が一時期考えていた穏健なプロテスタント教の導入が突然中断されました。そして200人から300人の容疑者が逮捕され、異端とみなされた容疑者数十人が磔刑に処されるに至ったのです。1560年のこと、アンリ2世とカトリーヌ・ド・メディシスの長男である新国王フランソワ2世は16歳でした。彼はその前年にスコットランド女王メアリー・スチュアートと結婚していました。当時の実権は王妃メアリーの伯父ギーズ家が握っており、ギーズ家は新教徒（プロテスタント）の弾圧の支持者でした。ギーズ家の影響を排除するため、新教徒たちは、1560年3月27日と29日に、アンボワーズ城でフランソワ2世を誘拐しようと企てます。しかし陰謀を企てた彼らは捕らえられ、裁判にかけられ、広場で処刑されました。その中の何人かは、「みせしめとして」城のバルコニーに吊るされました。この王国の主要人物の間に起こった対立は、1572年8月24日夜のサン=バルテルミーの虐殺において頂点に達します。

もともとこの場は、国王が近親の人々を迎えるために荘重に整えた部屋でした。現在ここは、家具や王の食事の習慣に関する品々の展示場となっています。中世の脚台に代わって「イタリア風の」テーブルが用いられるようになりました。このテーブルにはふんだんに装飾が施され、継ぎ足板を備えています。当時は食卓の作法の発達が遅く、歯が二本しかないフォークが使われていました（アンリ3世の時代までは、大抵の人々はナイフとスプーンを使っていました）



フランソワ1世



ルネサンス様式の大きなクルミ材の椅子



ルネサンス様式の装飾が施された陶器  
19世紀

#### ルネッサンス期における遠近法の導入

家具調度品に関し、15世紀末のゴシック様式は、ナップキンのひだ飾りや尖塔アーチのモチーフを特徴していました。ルネッサンス期になると、トロンプルイユと呼ばれる古代の遠近法が再認識されるようになりました。この手法には、家具とタペストリーの装飾に深い奥行きを与える効果があります。



## ルネッサンス様式の居室 - 2階 国王の寝室

この部屋はフランソワ1世(1494年/在位1515年～1547年)とその息子アンリ2世(1519年/在位1547年～1559年)の寝室でした。また、アンリ2世の妻カトリーヌ・ド・メディシス(1519年～1589年)にもこの寝室は利用されていました。彼女は夫の悲劇的な死の後、息子たちの治世下において積極的に政務に携わりました。この寝室の装飾は、16世紀の装飾芸術に遠近法が取り入れられたことを良く示しています。

### 芸術を奨励した者、レオナルド・ダ・ヴィンチ

レオナルド・ダ・ヴィンチの知見の広さ、学識の高さ、そして才能はフランスの宫廷の賞賛的でした。彼の影響力は、「芸術と文学の庇護者」であったフランソワ1世の名誉をさらに高めます。こうして1519年6月、フランス国王はこの巨匠の肖像画の数々を購入しました。国王の礼拝堂に飾られた「聖母子と聖アンナ」は、その中でも有名な作品です。レオナルド・ダ・ヴィンチの死後も、18世紀と19世紀にその功績はより広く認められました。画家フランソワ=ギヨーム・メナジヨ(1744年～1816年)の1781年の作品「レオナルド・ダ・ヴィンチの死」には、フランソワ1世が、このトスカーナ地方出身の巨匠の息を引き取る瞬間を見守る様子が描かれています。ダ・ヴィンチは、王が彼に与えた王城近くのクロ・リュセの館で亡くなったとされています。実際は、この日国王はサンジェルマン・アン・レーに赴いていたためダ・ヴィンチの死に立ち会っていません。ただし、この作品は芸術の庇護者であった王と、フィレンツェの巨匠の親交の深さを感動的に表しているといえるでしょう。同年、国王ルイ16世はこの絵を購入し、ヴエルサイユの回廊を飾る予定のタペストリー製作のモチーフとして使わせました。この作品と同じ場面が、ジャン=オーギュスト=ドミニク・アンゲル(1780年～1867年)の優れた筆による「レオナルド・ダ・ヴィンチの死」(1818年の作)に用いられています。画家メナジヨは、これにより19世紀の間に流行したトルバドゥール様式の先駆者の一人とされています。この場面にインスピレーションを得た数々の銅版画が、多くのブルジョワ階級の邸宅に飾られ、ルネッサンス期の2人の傑出した人物とされる、国王と芸術家の名声を高めました。



カトリーヌ・ド・メディシス  
アンリ2世の肖像画

フランソワ=ギヨーム・メナジヨの1781年の絵画「レオナルド・ダ・ヴィンチの死」、アンボワーズ市委託



## ルネッサンス様式の居室 - 2階 衣装部屋

19世紀に改装された、寝室に隣接するこの部屋には、王と王妃の衣装が保管されています。

### 王城の混沌とした運命

アンリ3世(1551年/在位1574年～1589年)以降、君主のアンボワーズ滞在はまれになりました。アンリ4世の時代に、宫廷はロワール渓谷を永久に去り、イル・ド・フランス地方へ移りました。

アンボワーズに17世紀から18世紀にかけて滞在した君主たち  
(コレクション外)



ヘンリー4世



ルイ13世



ルイ14世



スペイン王フェリペ5世

王城が放置されるようになると、かつての栄光の名残は衰退してゆきました。王城の牢獄や塔は王国に反逆する敵に対抗する目的に利用され続けました。その例として、1661年のニコラ・フーケや、17世紀と18世紀の捕虜が挙げられます。王城の要塞がルイ13世に対する反乱に利用されるのを防ぐため、大臣リシュリューは1631年に要塞の取り壊しと堀の埋立てを命じました。アンボワーズ城は、そういう状況下であっても、17世紀の歴代の国王の滞在に利用されました。アンリ4世(1553年/在位1589年～1610年)は、1598年から1602年にかけて滞在、ルイ13世(1601年/在位1610年～1643年)はより頻繁に訪れ、ルイ14世(1638年/在位1643年～1715年)は、1650年から1660年にかけて滞在しました。



この階段をご利用になれません。

Histopad®(イストパッド)を使って、大広間にいながら3階部のバーチャル見学することができます(お持ちで無い場合は、各部屋の係員にお申し付けください)。オーマル公の回廊に向かうスロープへ、係員がご案内いたします(見学順路№15、健常者の見学順路の最終段階に合流します)。



## 19世紀のサロン - 3階 オルレアン=パンティエーブル家の書斎

1763年に、ショワズール公（1719年-1785年）は国王ルイ15世からアンボワーズ城を譲り受け、公爵貴族の所領としました。しかし彼は後に城を放置し、その近くに建てられたシャントルー城（現存していません）に移り住みました。彼の死後、ルイ16世の従兄弟であり、ルイ14世の準正された孫と認められたパンティエーブル公（1725年～1793年）に1786年に買い取られます。彼は1789年に、王族の居住棟の内装工事と、新しいイギリス式庭園の工事を着工させました。庭園の曲がりくねった小道は現在も残されています。西側の「ギャルソンヌ」と呼ばれる塔の上には、18世紀に流行した、中国趣味の八角形の塔が建てられました。城はフランス革命時に没収され、火事に遭いました。また帝政時代の執政であったピエール=ロジェ・デュコは、数回にわたって計画的な解体を行いました。ルイ=フィリップ・ジョゼフ・オルレアン公爵（「エガリテ」とも呼ばれています。1747年～1793年）の未亡人の、ルイーズ=マリー=アデライード・ド・ブルボン（1753年～1821年）がこの城を相続しました。王政復古時代、彼女はパンティエーブル家の唯一の継承者でした。

この書斎には、後にフランス国民の王となる、ルイ=フィリップ1世の母方の祖父と両親の、18世紀末の肖像画の数々が展示されています。



ショワズール公爵



パンティエーヴル公



ブルボン=オルレアン  
家の系譜



## 19世紀のサロン - 3階 オルレアンサロン

1821年に、ルイ=フィリップは母ルイーズ=マリー=アデライード・ド・ブルボン=パンティエーブルからアンボワーズ城を受け継ぎました。後にフランス国民の王（1773年/戴冠1830年/1850年）となる彼は、当時城の周辺にあった46の家屋を手に入れ、それらを取り壊すことによって、城壁をよみがえらせます。オルレアン公は、サン・テュベール礼拝堂の最初の修復工事を行い、火事で朽ち果てた旧七要徳の館を屋上テラスに改築し、ミニームの塔の上部に展望サロンを増築しました。



フランス国民の王、ルイ=フィリップ

ルイ=フィリップは国王ルイ14世の弟、フィリップ・ドルレアンに始まるブルボン家の分家の長でした。ルイ=フィリップはヨーロッパ諸国、そして米国へ亡命する以前は、初期の革命思想を支持していました。1830年7月、三日間の反乱「栄光の三日間」の後、国王シャルル10世は退位を余儀なくされました。そしてルイ=フィリップがその先進的な思想と大衆的人気によって、王座に就くことになりました。こうして「7月王政」の名で知られる18年間（1830年～1848年）の治世が始まります。ルイ=フィリップは改正された憲章（新憲法）の宣誓を行い、フランス国民の王、ルイ=フィリップ1世として即位しました。その治世の初期には経済的繁栄に恵まれましたが、やがて深刻な経済・社会的危機に見舞われるようになります。ルイ=フィリップが選挙改革の実行を拒否したことから人々の不満が表面化し、「革命宴会運動」が起こるようになりました。パリでの革命宴会の禁止によって暴動が勃発し、1848年2月24日、国王は退位を余儀なくされます。ルイ=フィリップは英国に亡命し、1850年に死去しました。



## アブド・アル・カーディルとアルジェリア征服の始まり

1827年の春にアルジェ太守とフランス領事に外交的衝突が起きたことで、アルジェ攝政とフランスの間の緊張が高まり、1830年6月にフランス艦隊の軍がアルジェ付近の海岸から上陸するに至りました。フランスの駐留部隊は、港湾地区全体に陣営を設けました。オスマン帝国のスルタンに従う統治者である、アルジェ太守とオラン太守は亡命を余儀なくされます。オラン地方では、アブド・アル=カーディルの父がフランス侵攻に第一線で対立する役割を果たし、アブド・アル=カーディルはそれに続いで1832年に闘争を始めました。そして24歳で複数の部族を率いる首長（「総督」）の座に就きました。

### オルレアン家の王子たちの遠征

ルイ・フィリップ王の5人の息子たちがアルジェリア侵攻に参戦したことが、王家に威光を添えました。ヌムール公は1837年9月13日のコンスタンティーヌの奪取に加わり、王家の継承者である、オルレアン公は鉄の門（ビバン山脈）への遠征で1839年の秋に狭路を超えます。若いオーマル公が入隊していたフランス軍は、1843年5月16日にスマラと呼ばれるアブド・アル=カーディルの軍事基地を征服した功績により、彼は25歳という若さにもかかわらず、1847年9月にアルジェリアの総督に任命されました。ジョアンヴィル王子は海軍准将に任命され、1844年にタンジェとモガドールにて艦砲射撃を指揮しました。そしてモンボンシエ公は1844年のビスクラでの戦闘と1855年の対カビール人の戦闘で手柄を立てました。

### アンボワーズでのアブド・アル=カーディル首長の捕囚生活（1848～1852）

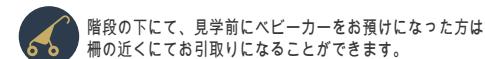
アブド・アル=カーディルはフランス軍と15年戦った後、降参しアルジェリアに戻らないことと引き換えに、回教の地へ移ることを要求しました。その要求は、その当時アルジェリアの総督であったオーマル公に受け入れられ、1847年12月24日にアブド・アル=カーディルは家族と側近を連れて乗船しました。このアブド・アル=カーディル首長と取り交わされた約束は、パリのフランス政府に保証されず、船が南仏のトゥーロンに寄港した際に彼らは捕虜とみなされることが判明したのです。1848年2月24日のフランス革命の後も、彼の苦境は進歩せず、首長は従者と共に捕虜としてポー城、そしてアンボワーズ城へと1848年11月8日に移送されました。彼らはこの地に4年間幽閉され、囚われの身となっている間、フランスとその他の国において多くの批判の声が上がりいました。世論はアブド・アル=カーディルの釈放を要求する傾向が強くなっています。その当時フランス共和国大統領であったルイ=ナポレオン・ボナパルト王子は、1852年10月16日に自らアンボワーズに赴き、アブド・アル=カーディルに釈放が直ちに適用されることを告げました。首長はその後パリに行き、人々の支持と尊敬の意を受け、フランスを離れました。そして彼が望んでいたように、オスマン帝国のダマスカス近くに移り住みます。1860年7月、アブド・アル=カーディルはダマスカスで数千人ものキリスト教徒を虐殺から保護しました。彼のこの英雄的な行動の報道は、世界中に激しい反響を巻き起こし、ナポレオン三世皇帝は彼に最高勲章である大十字レジオンドヌール勲章を与えます。アブド・アル=カーディルがアンボワーズを最後に訪ねたのは1865年8月29日であり、アンボワーズの全市民に熱狂的に迎えられました。



## ミニームの塔

ミニームの塔の屋上からは、40メートル眼下にロワール河が望めます。皇子兼大統領であったルイ=ナポレオン・ボナパルト（1808年～1873年）は、1843年に建設された展望サロン（現存しません）に1852年10月16日に迎えられ、アブド・アル=カーディル首長の釈放に署名しました。この塔の上部は、19世紀末に建築家ルプリッシュ=ロベールによって全て改築されました。

階段をご利用になりますと、シャルル8世の治世下に建設された、騎兵の塔の傾斜路まで下りることができます。



階段の下にて、見学前にベビーカーをお預けになった方は、柵の近くにてお引取りになることができます。



騎兵の塔の傾斜路

### 炎から脱出した皇帝

国王や帝王は引き馬や騎馬のまま簡単に町から城のテラスまで上ることが出来るよう、塔の傾斜通路は巧みに設計された螺旋を描いています。1539年12月にフランソワ1世に招かれていたカール5世皇帝は、もう片方の騎兵の塔、ウールト一塔から王城に入りました。皇帝の滞在中、隊列が塔を上っている最中に、たいまつ（火薬）が塔の垂れ布に燃え移るという事故が起きました。皇帝はこの火事から無事に脱出し、その翌日フランドル地方に向けて旅立つことができました。

騎兵の塔の上部から、オーマル公の回廊に入ります。

### オーマル公の回廊

この回廊には、ルイ=フィリップの五男であり、1895年から城の所有者であった、オーマル公（1822年～1897年）の名が付いています。軍人、政治家であった彼は、同時に芸術の名高い庇護者でした。彼のフランス最大の書籍と古美術品のコレクションは、現在フランス学士院の管轄において、シャンティイ城に集められ、保管されています。

ルネッサンス期には、この回廊は右側の王族の居住棟と、アンリ2世の居室及び左側に平行している、現存しないアンリ2世の子供たちの部屋（庭園に面していました）をつないでいました。



## 王城の庭園

造園技術の歴史において、アンボワーズの空中庭園は15世紀最後の年に重要な発達を遂げました。ナポリ王国での東の間の勝利からの帰路、シャルル8世は、イタリアの庭園に感嘆された思い出を抱いていました。城に帰還した彼は、王城の大工事に造園される箇所を含めたのです。造園を任されたナポリ出身の聖職者ドン・バッティエロ・ダ・メルコリアーノは、新しい居住棟に隣接する庭園の実現に尽力しました。この庭園は、観賞用でありながら、五感が研ぎ澄まされ心の静けさが得られる場であるという発想によって造られました。庭園見学の順路は、植物の多様性と豊富な鳥類の観察に重点をおいて描かれています。

説明書の裏面の図面

### ナポリのテラス

ミニームの塔出口の左側に位置する、このテラスには数年前まで菩提樹が奥に至るまで植えられていました。この菩提樹の林が、イタリアから戻ったシャルル8世の要望により1496年に作庭された最初の庭園の形態を隠していました。ドン・バッティエロが考案した庭園は、周囲の風景を開け、居住棟から眺められる、フランスルネサンス様式の庭園の原型を成しています。



テラスの高台には、敷地の北東にある中世の要塞に沿って植えられた並木道のがびています。この部分は防衛のために高く造られていましたが、後に展望台となり、その下にはルイ12世の紋章のヤマアラシのリリーフが施された扉のある、小さなホールが建設されました。この展望台から、左側の要塞の向こうにある広い堀と堀の内壁が見えます。

### 風景式庭園

河を背にして南に向かうと、昔口マン様式の庭園であった場所の、散歩道に入ります。ここに近年、セイヨウヒイラギガシ、ツゲ、イトスギ、スタージャスミン、葡萄の木、イネ科の植物、ゼラニウム、カルドンなどの植物が再び植えられました。

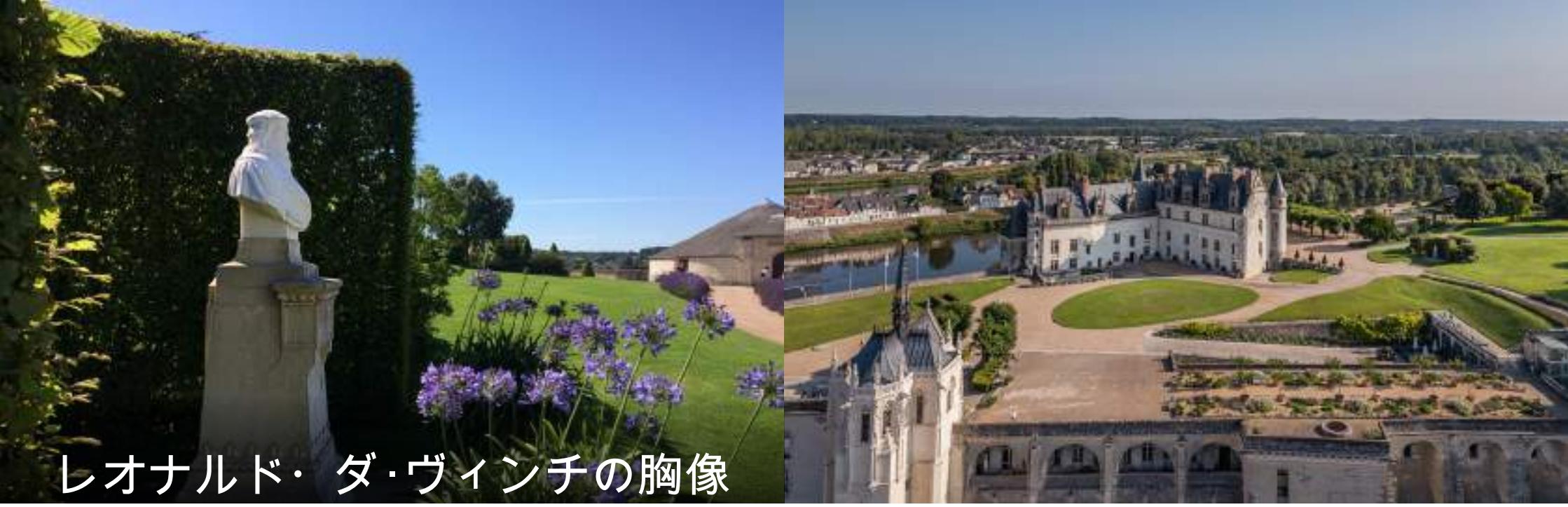
## 王城の庭園

庭園の中心を通る道の周りをたどって、小道が配されています。この中心の石畳の道は、昔の入口（木製格子の門があります）から居住棟にまで続いています。庭園の中のこの位置から、遠くへ吸い寄せられるように景観を望むことができ、同時に城の各箇所（礼拝堂、池、各塔の屋根など）が優雅な装飾の小細工のように目に入ってきます。

テラスの南東部にはレバノンのヒマラヤスギが聳え、2005年に芸術家のラシッド・コーライチによって構想された、東洋の庭園が見られます。東洋の庭園は、首長アブド・アル=カーディルの、アンボワーズで逝去した従者達の思い出を讃えるために造られました。規則的に並んだ記念碑の中を、メッカの方向に流れるように伸びる緑の線が走っています。

ルイ=フィリップの時代に植えられた、レバノンのヒマラヤ杉の太陽を遮る影の下に池が再現され、庭園に欠かせない涼しさをもたらします。水が想起させる生命精気と美的観点から、庭園には必ず池などが配されました。

右側の礼拝堂に向かって、大型鉢に植えられた桑の木が囲う3つのパティオで構成される、七要徳の庭園が広がっています。こんにち失われてしまった、七要徳の館の位置に造園されました。桑の木はこの地を象徴する樹木のひとつです。ルイ11世は、アンボワーズで1470年3月14日に署名した手紙により、トゥールに絹織物工場を設立することを命じました。この工場は、19世紀まで、トゥール渓谷に富をもたらしました。



## レオナルド・ダ・ヴィンチの胸像

庭園の低い位置には、レオナルド・ダ・ヴィンチの遺言に従い、彼が最初に埋葬されていた聖フロランタン参事会教会（11世紀のロマネスク建築）の有った場所に、カラーレ大理石に刻まれたダ・ヴィンチの胸像（アンリ・ド・ヴォレアルの作）が建てられています。

### レオナルド・ダ・ヴィンチの最初の墓

1519年4月23日、レオナルド・ダ・ヴィンチは公証人ギヨーム・ド・ブローに遺言を口述しました。それによると、「遺言者は、アンボワーズの聖フロランタン教会境内に埋葬され、その骸は教会の司祭に運ばれることを希望する」とありました。1519年5月2日に彼は他界し、遺言書に記された場所に遺骸は埋葬されました。この11世紀の教会は、1806年から1810年にかけて取り壊されました（レオナルド・ダ・ヴィンチの胸像が、城の庭園の中の教会の元の位置を示しています）。国立高等美術学校の総監、アルセーヌ・ウセーの指揮により、1863年に発掘作業が行われ、ダ・ヴィンチの名と画家の守護聖人、聖ルカの名の断片が彫られた、碑石の近くの骸骨を発見しました。フランソワ1世の時代に使われていたイタリアとフランスの硬貨など、収集された情報を元に、アルセーヌ・ウセーは骸骨をレオナルド・ダ・ヴィンチのものであると特定することができました。ダ・ヴィンチの遺骸は、1874年に最終的にサン=テュベール礼拝堂に移されました。

### 安全設備



監視ビデオ



未成年の方々は、付き添いの保護者が責任を持つものとします。



城壁の周辺で人を押したり、城壁をよじ登ったりしないでください。周辺の住民に危険ですので、城壁の外へ物を投げないでください。



火災時にはサイレンが鳴り、退出を促すランプが点灯します。係員が見学者の救助をいたします。

-出口1：日中の見学で、旧厩舎（現在の売店）とウールトーの塔を経由する出口。  
敷地の下へ降りる勾配をたどってください。そしてオランジュリー（トイレがございます）に続く傾斜路に入り、旧厩舎（Histopad©（イストパッド）のカウンターと売店があります）を通過してください。

そこから2番目の騎手の塔である、ウールトーの塔の中に入ります。塔内では、15世紀末期の見事な「滑稽彫刻」を施した装飾部が数箇所にわたって見られます。塔の傾斜路を降りてゆくと、町の中心部に到着します。



-出口2：閉場時に、旧厩舎（現在の売店）が閉まった後の出口



くの紋章の回廊が

敷地の下へ降りる勾配をたどってください。そしてオランジュリー（トイレがございます）に続く傾斜路に入ります。そのまま傾斜をたどって、入口近くの紋章の回廊から外に出ることができます。

-出口3（身体障害者向け）：



車でお越しになつたお客様は、特設されている入口から出ることができます。



02 47 57 00 98

写真のクレジット：

© Erwan Fiquet : P1, P4(1), P19(1)

© RMN : P9(1), P11 (portraits), P12 (portraits)

© Musée de la Légion d'Honneur et des Ordres de Chevalerie : P2(1)

©Leonard de Serres : P2(2), P7(2), P19(2)

© FSL : P5, P7, P9(2,3), P10 (1,3,4), P11, P12(1), P13, P14, P15, P16, P18

© ADT Touraine JC Coutand : P6 ; P8 ; P17

